

関西大学社会学部教授 岩見和彦先生最終講義

社会学は人間学、と語り来て

**考えあぐねた結果、結局自らを振り返ってみる
ことしかできなかったというお粗末なお話**



平成 26 年 1 月 25 日 (土)

於 関西大学社会学部 A301 教室

関西大学社会学部教授 岩見和彦先生最終講義

社会学は人間学、と語り来て

**考えあぐねた結果、結局自らを振り返ってみる
ことしかできなかつたというお粗末なお話**

※この講演録は、平成 26 年 1 月 25 日(土)に関西大学社会学部 A301 教室
において講義した内容を、岩見先生ご自身が加筆訂正したものです。

正誤表

P. 18 最終行

(誤) 二〇〇二年版から

(正) 二〇〇六年版から

以 上

平成二十六年一月二十五日（土） 第3学舎A301教室

岩見和彦教授・「現代社会論Ⅱ」最終講義

社会学は人間学、と語り来て

—考えあぐねた結果、結局自らを振り返ってみることしかできなかったというお粗末なお話—

○山本雄二　それでは、ただいまから岩見和彦教授の最終講義を行います。

初めに、私のほうから、ごく短く岩見先生の御紹介をさせていただきます。

先生は、一九八〇年に本学に着任され、以来三十四年の長きにわたって勤めてこられました。学部の科目としては、当初は「社会調査実習」という科目。その後は、「教育社会学」や「日本の社会と文化」という科目を、また近年では「現代社会論」を主な専門科目として担当してこられました。

講義では、先生の研究の柱であります青年社会学をベースにしつつ、新しい理論にも常に目配りをし、その時代、時代に特徴的な社会現象を幅広く取り入れながら説明するスタイルをとってこられました。こうしたスタイルは研究論文にも活かされており、学会でも高く評価されているところです。先生の授業が常に人気授業であったのは、そういうところに秘訣があったのだと思われまます。

授業と言えば、先生のゼミ指導にかける情熱も半端ではありませんでした。きょうはゼミの卒業生の方もたくさんおいででしょうけれども、大学での勉強イコールゼミと言う人も少ないのではないのでしょうか。

学部や大学での役職、また、国のさまざまな委員会での御活躍につきましては、詳しくは申しませんが、社会学部長や副学長を初め、さまざまな役職を歴任してこられました。経歴を拝見しますと、関西大学への着任以来、ほとんど全ての期間にわたって、何らかの形で学部や大学の運営に携わってこられたことが見てとれるわけですが、これは実に驚くべきことです。

こんな形で紹介になっているのかどうかわかりませんが、できるだけ短くということでご紹介をさせていただきます。

前置きはこのぐらいにしまして、小川学部長から一言御挨拶いただきます。

○小川博司

小川でございます。また前置きの二になるんですけども、本日は岩見和彦先生の最終講義ということであります。大変さみしいことですが、これも新たな旅立ちへの一つの節目と受けとめております。

今、御紹介にありましたように、岩見先生は、三十四年間にわたって本学で教鞭をとられてきました。岩見先生、長い間、本当にありがとうございました。

私ごとになるんですけども、毎年九月、奈良県にある飛鳥のセミナーハウスで学部生のゼミ合宿を実施しております。昨年、夏休みに予約に行ったところ、岩見先生が二泊三日分、全

館百名分予約されているということでありました。後で伺ったところ、ゼミの卒業生に呼びかけて、卒業生全学年の合同ゼミ合宿を行ったということでありました。三日間のうち、いつ来てもよいと。しかし、参加者は必ず何らかの報告をするというものだったと伺っております。大変素晴らしいアイデアだと感銘を受けました。また、それが実現できるという先生と卒業生の関係、すばらしいと思いました。

当初、岩見先生は、その合宿をやったので最終講義はされないとおっしゃっております、それはないでしょうと。ゼミ生だけというのはないですよということ、無理やりお願いしました。ぜひ、ゼミ生以外にも講義をとということをお願いして、本日の最終講義ということになりました。

先生の御専門は、文化社会学、教育社会学、青年社会学と非常に多岐にわたります。岩見ゼミからは、すばらしい学部生が旅立ったばかりではなくて、今、学会で中核となって活躍している研究者も輩出しています。

本日はたまたま、若者について研究する日本の中心的なスタディグループである「青少年研究会」の例会が、同じ日にこの学舎の、隣の部屋で開かれるという幸運もありまして、そ

一 現代青少年の意識や行動を理論的・実証的に研究することを目的に、全国の十を超える大学から社会学や教育学の研究分野を中心に集まった研究グループ。一九八〇年代前半に高橋勇悦代表のもとにスタート、その後九〇年代からは東京と神戸での大規模調査を実施するなど、精力的な調査・研究・出版活動を展開。現在は藤村正之氏（上智大学）が研究代表。

の青少年研究会のメンバーも数多く、ここには参加しております。

そして、また、多くの教え子の皆さんも参加してくださいました。土曜日にやってよかったです。今、改めて思っております。

きょうのタイトル、前の黒板あたりどこにも出てないんですけども、「社会学は人間学、と語り来て」というタイトルです。なんと先生らしいタイトルかなと思います。私たちは時に、社会学が人間の学であるということを忘れがちになります。そのことに思いをいたしますと、本日の講義は本当に心して聞かねばならないなと思っております。

じっくり拝聴させていただきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○山本雄二

それでは、お待たせしました。岩見先生、よろしくお願いいたします。

○岩見和彦

皆さん、こんにちは。本名、嫌み（いやみ）、ニックネームは岩見（イワミ）と申します。この片桐さんにいつも突っ込まれるネタももう、きょうが最後かなと思います。きょうは実にいろんな方が、こんなにもたくさん来ていただいて、いったい何をお話したらいいのかわからないというか、本当は今すぐにでも逃げ出したい思いでいっぱいあります。

ただ今、御紹介いただいたとおり、社会学部には三十四年いたことになりました。ゼミ生の数で申せば、五百数十名になるうかと思えます。こうやって来られたのは、やはりゼミ生諸君の存在というものがあつたからだとか常日ごろから考えておりました、さつき、小川さんが披露し

てくださったとおりに、三十期生、今の四年生が三十期生なんですが、全期生が飛鳥の関西大学のセミナーハウスで最低一回は合宿をしている。そこで、昨年九月、定例の四回生ゼミをするときに、よし、自分なりに最後にふさわしい企画を立てて、それをやり切る、それで実質、退職記念のイベントは終わりにしようかと本当に思っていました。三年ほど前からです。そこで全館貸し切りというような無謀なことをお願いして、幸いにして実現いたしました。

ここにあるのは、みんなで九十九名の人が参加してくれたのですが、そのうち七十数名の人が準備してくれた、そのときのレジュメ集なんです、これです。私は何も勉強も研究もしないんですけれども、ゼミ生は一生懸命やってくれてるようで、この冊子を私は墓場まで持つていこうかなと思っておる次第です。

前置きが長くなりましたけれども、そんなわけで、きょうも、たまたま土曜日というようなこともございまして、六十人ぐらいのOB・OGが来てくれています。青少年研の藤村さん（注一参照）や土井さんといった重鎮が来ておられるんですが、申し訳ありませんが「カボチャ」にさせてもらいます、意識するとボロボロになってしまいそうなので。学部の同僚の先生たちもたくさんおられますが、みなさん「カボチャ」に見立てて、つまり無視して、この六十人の卒業生をメインのターゲット（お客さん）にして、恥ずかしながら思い出話をするしかないな、と。現役生の人も申しわけない、「カボチャ」です。五十分ほど、だからだらしたお話を

なるうかと思いますが、おつき合いいただけたらと思います。

この二日間、何を語ろうか本当に迷いました。棚卸しするとしても、それほど大したものもないし、じゃあ、それ以外に何をするか。何か話すことを急遽こしらえられるかといったら、それも間に合わない。「考えあぐねた結果」、サブタイトルの文章ですが、「結局自らを振り返ってみることしかできなかったというお粗末なお話」しかできない、ということになったわけです。

○序の序の序（関大着任以前の道標）

レジユメの「序の序の序」というところを簡単に説明させていただきます。私自身は、滋賀大の経済学部——彦根にございます、ひこにやんで有名になりましたが——、その山崎良也^三という先生のゼミで、ケインズの『一般理論^四』などを読まされたり、四回生では、エコノミスト賞をとった藤野正三郎さんの『日本の景気循環』^五なんて、およそ私には似合わないものを、わけがわからないまま少しかじったりしました。当時は、マル経、近経と呼ばれる、大き

三 一九三二〜二〇一〇年。九州大学大学院修了、主著『景気循環と加速度原理』、東洋経済新報社、一九六六。滋賀大学には一九六一〜七〇年在職、のち九州大学教授、九州産業大学学長などを歴任。

四 J・M・ケインズ（一八八三〜一九四六）の主著『雇用・利子および貨幣の一般理論』、東洋経済新報社、一九三六^四四一〇頁。

な大きなイデオロギーの対立をバックにした学問上の対立も強烈で……。私は、若い人は当時、ほとんどそうだったんですけれども、マルクシズム的な平等主義というふうなものに憧れておりました。なので、ゼミもそういうものをもったんですが、一年、二年で受講したもののなかに、これという魅力的なマル経の授業がなかった。この山崎先生、近代経済学の専門で、そういう意味では私にはなじみがなかったはずなんですが、当時若くて澁刺として、とつても一生懸命授業をされているのが印象的で……。結局、「人間」で選んでしまいました。

卒論はたしか、今から思うと二カ月ぐらいで書いたと思います。ごめんなさいね、ゼミ生には一年半かけて書けと指導してきたのに、当の僕は二カ月で。卒論のテーマは、「低開発国問題の基本視点と世界形成主体への道」と、何のこっちゃ、わからないようなお題ですけど、ネーションステートという国民国家が土台になっている以上は云々かんぬんという、今から思えば当たり前のことを、難しげに言い直しただけ。先進諸国の後を追いかけるような低開発国の開発では意味がない、弱い者同士が地域でまとまる、あるいは国家間が連合して新しい世界秩序を形成するような、そういうユニットになれという誰かの受け売りをもっともらしく書いたものであります。当時をふりかえると、私にとつては、大学に行くんだったら社会科学を。社会科学の王様は経済学だ。それを知らずして一人前にはなれない、というような思いに押されての学部選択だったんです。

しかし他方では、私が高校二年生ぐらいでしようか。御存じの方もおられるのかもしれない

んが、NHKの「青年の主張コンクール^五」という、成人式、一月十五日にいつも固定していたときですが、その番組に出てくる若い人たちのいろんな主張を聞いている中で、何か僻地教育というふうなものにすぐくびびってきたんです。それ以来いつしか私自身は、よし、将来、離島でもいいし、僻地でもいいんじゃないけれど、そういうところで、自分が何かこれと思うような関係性みたいなものを築いていくような仕事、つまり教師になろうと、そんな気持ちはずっと持ち続けていたんです。単純ですね、ほんと。経済学部だと社会科の教員ということになるんですが、そんなキャリア・イメージで大学も四年間過ごしました。だから、まったく就活はしませんでした。

それにはこんな事情もありました。教職免許を取るためには幾つか必要な授業を受けなくてはなりません。ところが、先生の名前を出すと非常にまずいですけれども、滋賀大学教育学部というのは前身が滋賀師範です。大津にあるんです。夏休みに一生懸命彦根から通ったりして、教職の授業を受けたりするんですが、もうひとつおもしろくないんですね、中身が。教育は文化の遺産だとか、なかなかいいキャッチフレーズにも出会ったんですが、全体として、このまま教職の単位を取って現場へ立つのは、子どもたち、生徒諸君に対して失礼だと本当に思ったのです。もうちよっと「教育」について深く突っ込んだ勉強をしたいな、しなければならぬなと思いついたわけです。

ちよつとここで、エピソードを。教育学部で受講した科目に教育心理学というのがありました。これは、もうネタがばれているんですけども、そのときの先生が関口先生という方で、ちよつと神経質そうに見える方でした。でも、何かほかの授業と違うんですね。とてもとても鋭い切り込みをしてくる授業でして、課題なぞも、とても私の波長に合うものでした。それが、なんと関口理久子先生のお父さんだったということの後で知り、本当にびっくり仰天したわけです。ちよつと横つちよに入っちゃいましたけれども、お父様によろしくお伝えください。

さて卒業後、じゃあ、もう少し勉強するには、ということ、京大教育学部の聴講生になりました。六九年のことですから、全共闘運動というか学生運動がすごいときで、百万遍は火炎瓶で燃えたりしていました。高校時代の思い込みでたまたま自分の道をそうは決めたものの、学生運動を目の当たりにして、私は考え込んでしまった——そんな状況に置かれたんですね。あるとき道端に座り込んでいたら、後ろから機動隊が何百人も来て、僕も逃げて、農学部温室の横つちよで隠れてました。何で俺、こんなところにいるんだ、と思いながら。

そんな六九年に、聴講生として幾つか授業を受けたるとき、実は、社会学というものを全く知らなかった私が、百万遍の、ちよつと門の真ん前にあつた古本屋で手にとつたのが、多分、有斐閣の『社会学』という入門書だったんです。「役割」だとかいう、今まで経済学では聞いたことがない、教育学でも聞いたことがない、そういう概念がぼつと目に入ってきて、立ち読みをした記憶があります。多分、五十円ぐらいで買って帰つたと思います。一気に読んだような気がします。だから、私は、社会学との出会いは学部を卒業した後、全く偶然に古本

屋で手にした本、そこからだったわけですから。結果的には、それがきょうに至っているわけで、とてもありがたい出会いだったと思っております。

六九年、七〇年は大学もバタバタしておりまして、自分の将来のことも具体的に考えなきゃいけないというので、まあ、だめもとでいいから教育なるものの根本を考えるために大学院でも受けようか。そこで事務室で聞いてみると、例の「低开発国問題の基本視点と世界形成主体への道」なんていうのでは、教育学の大学院の受験はできませんと言われました。何かそれにかわるものを書いて出さないかと。ならば、とでっち上げたのが、「現代社会の基礎構造―原理的考察」という名の論文もどきのもの。自身は、ダーレンドルフ^六をほとんど引用したものでした。社会階層というものをきっちり理解しないで教育を論じるなかれという、どう見ても中身の無いいいかげんなものでありました。でも、原稿用紙五十枚ぐらいを手書きでつくり上げて、誰の指導も受けなかったと思えますけれども、出しました。当時は、優秀な人は皆、大学を批判、大学院に行くなんてもってほかという風潮が（幸いにして？）ありましたので、そういう人は大学院へ行かなかった。私のようなちゃんぽらん人間が大学院に入って。多分、競争倍率〇・九倍ぐらいだったんじゃないでしょうか。ドイツ語は、ほとんどできなかったはずなのに、なぜか合格しました。後で教授に聞いたら、君のあの論文がたいへん高い評価を得

六 ラルフ・ダーレンドルフ（一九二九〜二〇〇九）。ドイツの社会学者、主著は『産業社会における階級および階級闘争』、ダイヤモンド社、一九五七〜七四。

てねえ、ということだったので、どこにどういう間違いが起こるのかわからないなと思ったものです。

大学院では、初めて学ぶことばかりで自分の研究関心も拡散してきました。あれこれ考えているうちに、結局、私はどんな社会現象も人間の生活、暮らしというふうなところに原点を置いて捉えなきゃいけないんじゃないか、といった思いを持つように。ちょうど日本の社会学者たちも生活構造論という、今から考えると正体不明とも言えるのですが、そういうものに目をつけ出して、関連書なども編纂されたりしました。私としては生活、つまり暮らしの中に何か潜在的な構造を見出すという、文化人類学ともちよつとちがう、何かそういうふうなものができるとしたら、これはおもしろいなと思つたわけです。

考えてみると、経済学では具体的な暮らしとか、生の人間というのが出てこない。近経なんか、なおさらそうです。ホモ・エコノミクス⁷で考えますから。教育に関しても、「教育は愛である」なんていう、当時の教育学の大御所の先生などの物言いが有名でしたが、教育は愛であるというのを何十回聞かされても、結局何もわからない、人間は登場してこないわけで。そこで、さっき言った役割人間という見方のほうが、はるかに私にとつてはリアルな人間像を提供してくれるものでしたので社会学へ行ったわけです。でも、それも何かもう少しリアルな

7 いわゆる経済人のこと。もっぱら経済合理性に基づいて行動する、とした経済学の「人間像」のこと。社会学ではホモソシオロジクス（役割人間）といったモデルがある。

場面に埋め込んでいかないと、私にはまだ、びびっとはこなかった。それは、簡単に言うと、格好つけて言うと、かぎ括弧で書く「生」、「生きる」とかいった、そんな言葉に象徴される何かだったんでしょう。ああ、生活構造論はそれに近いかなと思って、近づいて行っただけですが、土台、そんな大きなまた深いテーマに食い込めるわけはなく、この延長戦で書いた修論も、幾つかの文献を単にまとめただけのものでやり過ぎてしまいました。

ただ、有難いことに、私が手を出したこの「生活」研究のことを耳にされた先輩から、突然お声がかかりました。社会学者の加藤秀俊先生が京大時代につくったシンクタンク、C D I（コミュニケーション・デザイン・インスティテュート）との出会いが、そこから始まりました。「生活財生態学^ハ」という、今から考えたら、びびくりするぐらいの大型の調査プロジェクトに参画することができました。モノを通して「暮らし」の構造に迫ろう、というたいへん刺激的なものでした。石毛直道さんだとか、加藤秀俊さんら、いろんな先生たちと研究会で一緒にさせてもらいながら、実働部隊でいろいろ調査をやったり、報告書を書いたりしました。一応初代の切り込み隊長（？）役をしました。そのあとは、今は電通の偉いさんになっているTさんや、京都の出版社で活躍しているMさんが大きなプロジェクトを支えていって……。ともかく、大学院の博士課程において、結局、「生活」つながりで、こうしたプロジェクトに関わらせてもらったわけで、私にとって、この経験は本当に大きな意味をもっていただけつくづく感

謝しています。

なかでも、このプロジェクトの隊長とも言える方が、当時国立民族学博物館におられた栗田靖之先生だったんですが、文字通り社会調査の一からを、OJTで教えていただきました。実はかつて社会学部におられた高木修先生のお友達だったというご縁も、あとで知りましたし、なによりも私が、関大社会学部に職を得たのは、この調査の経験があったればこそだったわけです。

さて、そうこうしているころ、実は、これは身近な先生にもあまりお話ししてないんですけども、もう一つ私にとっては、大変意味のある出会いというか、出来事が進行していました。レジュメのその次にあります、ウエストン・A・プライスという人の歯の本の翻訳のことです。豊中で開業しておられる、ある歯科の先生が、自費出版したい、と言われている。これは日本の歯学会にとって物すごく大きな意味を持つ本なので、若い英語ができる人たちに、ちょっと手伝ってもらいたい。そこで、今は亡くなった大学院の先輩で荒木功というメディア論の研究者と、それから、もう一人は、呉宏明^九という今も京都精華大学で教鞭をとってる友人の三人で、この歯医者さんの本の翻訳をお手伝いすることになりました。六年ぐらいかかったでしょう。きょうは、持ってきておりませんが、一九三〇年代に、一人のアメリカの歯科医師が、ずっと世界各地を回って現地調査したものです。原始的な食生活をする種族の歯と体は健

康そのものなのに、文明食が入ってきてそれらを摂りはじめるとたちまち歯はボロボロになる、顎が細くなる、といった退化が起こることを記した物すごくショッキングな内容です。デンタルアーチは歯列弓と訳す、ということさえ知らない素人がやるわけですから、もう大変でした。実は、きょうは何を言ってもいいと思っているので申し上げますが、天理大学に三年おりましたので、都合三十七年間の大学の教員をやっているのですが、ひよっとして一番社会の役に立つ仕事と言えるのは、これなんじゃないかなと、思ったりしています。というのは、僕はほとんど五百ページ全部、目を通し文章を校正しました。荒木さんはサボリの人で、なかなか原稿が出ない……、呉さんは英語の達人なんですけども、日本語が当時はちよつと苦手でした、台湾の方です。梅棹忠夫先生に序文も書いていただいたりして、マスコミにも取り上げられ、その他いろんなところで評判になりました。数万冊、引き合いがあったと聞いています。

ちなみにこの片山恒夫という先生は、実は、日本でこの名前を知らない歯医者さんほもぐりだというぐらいの方で、日本で初めて、学校で歯ブラシ指導を導入されたことから始まり、朝日新聞で「歯無しにならない話」(資料⑧)という連載の中で、歯周病は全部ブラッシングで治せるんだということを実践で示したり、歯は全身病であるということをもう何十年も前に言っていた方なんです。開業医で歯周病学会の理事をされた方は他にいないんじゃないか、そんなすごい先生なんです。もうお亡くなりになりましたけれども。

脱線しました。そんなことをやったりしていたものですから、私の研究の焦点というのは、ますます拡散していきました。「生活」研究はそもそも何でもありますから、焦点がだんだん

絞りにくくなる。一方で、三十歳のとき、初めて就職した天理大学で、たまたま被差別部落の調査をしたい、ついては手伝ってほしいという話がありました。地域の隣保館に一週間泊まり込んで、地区の人と夜中まで議論したりわいわいやったり。これも物すごくいい経験になりました。

○序の序（関大社会学部での実習・講義）

こうやって振り返ってみると、関大着任以前、自分はいったい何をしていたのかなと、考え込んでしまうわけです。レジュメを書いていて、本当にそう思いました。先に申し上げたように、本音で言うと、歯の本の翻訳を手伝ったのが一番の仕事じゃなかったかなと——今頃、こんなことを言いますと、皆さん、お怒りになると思うんですけども。

そんな折、調査、実習関係で教員枠が一つとれたから、社会学部に来ないかと声をかけていただきました。天理大にいた私を引っ張ってくれたのが、大学院の先輩、竹内洋。○先生と徳岡秀雄先生でした。こうして私の今に至る、関西大学時代が始まったのです。あまり事情もよくわからないまま赴任して来て、三十四年が経ったわけです。これで、やっと「序の序」

一〇 当時、関西大学社会学部助教授。現関西大学東京センター長、京都大学名誉教授。

一一 当時、関西大学社会学部教授。元京都大学教授。

に入ります。

さつき御紹介がありましたように、社会学部では社会調査実習の担当がメインのポストでした。八一年に、一年遅れて持つことになりました。それから、その頃の手帳を見ていたら、教育社会学という科目は来てすぐ、持っていたようです。

教育社会学は、一応、大学院でも専攻していた形になっていたので、それをちゃんとやらなきゃいけないんですが、まあ、学歴主義とは何かとか、階層と教育のマクロな関係を解説することに終始しがちなわけです。もちろん、たとえば被差別部落の職業と教育というようなところで、私自身ももつと突っ込んだ論究をしなきゃいけないという課題意識は持っていたんですけれども、どうもびびっとこない。一方で、教育社会学は、アイデンティティは社会学。字義どおりに言うならば、対象は教育、方法論は社会学、教育という研究対象を社会学的方法で解析しようとするんだ、というのだけれど、どうも教育という現象だけにしぼって子どもたちの現実を抜き取ってきて論じることに、なにか釈然としないものを感じてしまう自分がいるわけです。社会学的なモデルで見ていると、それって、ちゃんと調べたら出るだろうし、ある種の構造的な問題の存在を確認はできるだろう。だけど、そうした確認作業をずっと自分の研究課題にしていくのか、というとその気は余りなかったです。

そうこうしているときに、メディア専攻の富田英典さん、ここにおられるかな、彼が大学院生でいまして——私が来てすぐ出会った人のひとりなんです——、同じようなことに関心を持っていたようなので、しばらくしてから、じゃあ、一緒に中学生のデータをとって何か共同

研究をしようよ、ということになつて。「生徒化」という概念を、もちろん、イリイチ^二の「学校化」の二番煎じもいいところなんです、それをちよつと考えてみよう。学校化といふのはあくまでも社会システムの発想なんだけど、生徒化といふのは、今風に、ルーマン^三の用語で言うなら、「心的システム」といつた土俵で論じられる概念として、想定したものです。つまり、あえて生徒化という概念を用いることで、もう少し子どもたちのリアリティーの問題に切り込むことができなかつたかというような話をしたりしたのも、このころです。

そんななかで、八四年に話があつて、青年論の論文を書きました。私にとつて、今、ここまでこうやってきたのは、これがきっかけになつたのは確かです。中身は大したものでもないですけれども——編者の近藤先生と有本先生には怒られるかもしれませんが——、ここで初めて若者論、青年論というふうなものに、私は手を染めることになりました。そしてこの出版元が福村出版だったという御縁で、関西大学社会学部社会学専攻のスタッフによる社会学のテキストを、新たに東京の出版社から出そうという以前のの思惑とが、結びつくことになりました。少し自慢げに言えば、今では日本でも名高い社会学テキストの一冊、まさに我がスタッフたちの手になる『基礎社会学』という本の誕生だったんです。八六年のことです。

二 イヴァン・イリイチ（一九二六—二〇〇二）。オーストリア生まれの哲学者、社会評論家、文明批評家。『脱学校の社会』、東京創元社、一九七二—七七などで知られる。

三 ニクラス・ルーマン（一九二七—一九九八）。社会システム論で知られるドイツの社会学者。

他大学の先生もおられるので宣伝しますが、片桐さん、しておいたほうが良いですよ。最初私を取り次いで話を進めていたのですが、実はこの初めの段階で、四年に一回、必ず改訂しようということを出版社に、福村の人に持ちかけ承諾してもらっていました。その後、大変ありがたいことに、きつちりと四年に一回、ずっと改訂してきています^四。ちなみに、私の、「ミーズム社会」という章は、この八六年の初版から登場しているんです。いままでしつこく残ってきましたが、とうとう、この三月で消えます。退職した人の原稿は速やかにお引き取り願う。後に入った人は、速やかにそこに入ってもらおう。常に、と言っても四年あくので、ラグはあるんですけども、社会学専攻の十二人とか、今は十五人になりますが、いつもメンバー全員が書き連ねている本にしていよう、と決めたんです。だから、「ミーズム社会」を残しておいてとか言っても、絶対に拒否される。その路線を引いたのは私ですから、曲げるわけにはいかないんです…。

さて、若者論、青少年論の話にもどりますね。八四年の仕事がひとつのきっかけともなつて、狭い意味での教育社会学というものからどんどん離れていきます。ある子どもを、生徒という局面でだけ抽出してきて、それに対してああだ、こうだと言つたつて、意味がないじゃないか。二十四時間のうち、六時間生徒をやつたつて、残りの時間は家庭の子であつたり、コンビニの子であつたり、あるいはゲームの子であつたり、メディアの子であつたりするんだから、そ

一四 出版社の事情で、二〇〇二年版からは世界思想社から刊行。この四年毎の改訂は引き続き実行されている。

れをトータルに捉える視点がなかったら、教育の、あるいは、学校化された子どもたちの生活の何か一部を切り取ってきて、そこで、ああだ、こうだ言っても、ひよつとして、それは、どうぞ御勝手に論評してくださいという話になるんじゃないの、そういう疑問がどんどんもたげてきました。

生活といい、人間といい、極端に大きな大きな、そういう世界に私の思いはどうも向いてしまふわけです。そんな巨大で複雑な対象に立ち向かって、ゾウの例えにあるように、ほんの一部にしかさわれないのはわかっているんだけど、何か、自分の切り取りやすいところを切り取って、そこで一生懸命つじつま合わせしていることの知の遊戯みたいなものが、私にはどうも耐えられなかった感じがあるんです。だから、論文も余り書いてないんです——それはうそです、単なるサボりです！

ともかく、そんなふうな中で、教育社会学から青少年社会学へと、ちよつと格好よく言うところの私の転換が起りました。教育社会学は、私にとつては、そこで非常にいいメンバーに恵まれたと思つてまして、いまだに社会学会より教育社会学にアイデンティファイしています。でも、私自身は、とりわけ最近はそののですが、教育社会学は悪い意味で、何て言うかな、分化されて、狭いところではかなり議論をしているのを見ると、腹が立ってしようがないのも事実です。割と最近はおとなしくなりましたけれども、部会で発表を聞いていると、ついつい手を挙げて、偉そうなことを言ってしまう。でも、それを許してくれるような学会なので、私はありがたい恩義を感じ続けてはいるんですけども。しかし、いや、だからこそ、教育社会学

が小ぢんまり縮小再生産していくことに關しては、いつも何か文句を言い続けています。

まあ、そんなわけで、十年間ぐらい書きためた(中身はみな中途半端なんです)文章を集めて、『青春の変貌』(関西大学出版部、一九九三)というタイトル、副題を「青年社会学のまなざし」というものにして、ちよつと教育社会学から少しずれたという意思表示をするような本を出すことにしました。きょう来てくださったという藤村先生が、日本教育社会学会の学会誌で、なんとこの本の書評をしてくださるという、僕にとつてはもったいないようなことをしていただいて。リプライもしましたっけ。でも余り意味がなかったですね、藤村さんがちゃんと触れられてくださったから。

「青春の変貌」なんてタイトルをいかげんにつけたら、その後、『若者たちの変貌』^{一五}だとか、『検証、若者の変貌』^{一六}といった立派な本がでてきた。この教室には、ことし春学期に受講してくれた人も何人かいるんですけど、変貌三部作といつて紹介したんですが、岩見の本はほとんど知られてないし、引用もされてない。変貌がはやると思いきや、三浦雅士^{一七}さんは、青春の、実は消滅みたいなことを言ってもいるので、変貌と消滅についての議論は、時間があればまた後で申し上げますが、私としては宿題をもらっている感じなんです。

一五 小谷敏著、世界思想社、一九九八。

一六 浅野智彦編著、勁草書房、二〇〇六。

一七 『青春の終焉』、講談社、二〇〇一。

教育社会学という科目じたい、八年、九年ぐらいは受け持ちました。しかし、実際にはほとんど、教育社会学というものの枠を超えていきたいという欲望が出てきていました。そうこうしているうちに、竹内洋さんが京大へ移られるというので、「日本の社会と文化」を僕にやれというお話が回ってきまして——きょう来ておられる卒業生の人たちには、私は日社文の先生だと思っっている方もいるでしょうし、もっと前の方は教社（教育社会学）の先生だと思っられるでしょうね——、日社文と呼ばれる科目を担当することになりました。そうですね、日本人論が批判される、ちようどそんな時期だったので、ロス・マオアさんや杉本良夫さんのもの^{一八}に触発されながら、先ほど話しました、C D Iの家の中の暮らし方、その写真データの分析みたいなものも取り組みながらお茶を濁して、九年ぐらい日社文の授業をやっていました。途中で一年間、四十歳になって初めて外国に出ました。行き先はメルボルンでした。昨年の秋、叙勲を受けられましたオーストラリア、モナシユ大学の日本語科の主任教授を当時していたネウストプニー^{一九}先生にご厄介になりました。外国人がみずから日本語で書いた最初の岩波新書が、ネウストプニーさんの『外国人とのコミュニケーション』（一九八二）です。たしか七、八年前で三十七刷りかされている屈指のロングセラーなんです、ご本人はチェコ人です。ネウスさんはその後、阪大の教授になられるんですけれども、鷺田清一（元阪大総長）さんが

^{一八} 杉本良夫／ロス・マオア『日本人は「日本的」か』、東洋経済新報社、一九八二など。

^{一九} J・V・ネウストプニー（一九三三）。当時、メルボルン日本研究センター所長を兼務。

教授会で隣同士でして、ネウス先生のおじいさんの写真を見る機会があったそうで、そこには一緒にあのカール・マルクスが写っていたので、びっくり仰天した、と話してくれたのを思い出します。どうも脱線が多くてすみません。

初めて外国というところで日本という社会を相対化する。そういう視点なぞももらいながら、なんとかこの科目を担当しておりました。そして、今から十六年ほど前、「現代社会論」という科目にまた担当が変更になりました。カリキュラムを整理することになって「日本の社会と文化」と「現代社会論」、どっちを残すか専攻会議で討議して、「日本の社会と文化」は「の」「と」という助詞が入っていて科目名としては、どうもね、一年生に聴かす専門科目としては、「現代社会論」のほうが食いつきがいいよね、というような形で、じゃあ、こつちを持ってとうふうなことになるました。結果、日社文はもう科目としてはなくなっちゃいました。実際は、この日社文は、僕にとつてはすごくおもしろい授業だったので、もちろん、間人主義がどうか、ベネディクトがどうのなんて余分なことを織りませながらではありますけれども、やっぱり大事な科目だと、今ではちよつと残念な気もしています。

さあ、それはともかくとして、現社論と呼ばれるもの。正直に言ってこれはもう、こんな能力のない私のような人間には、とても背負い切れるものではありませんでした。受講生がここにも来てくれますが、つい最近、試験もしたところですけれど、これまた、何かもつともらしい抽象論とかでお茶を濁すしかない、と。

私のこの講義の秋学期のメイン^{二〇}は、今田高俊さんのものをちよつと借りてきて、欠乏動機から差異動機へ、という話をします。つまり一九八〇年代に日本の社会は変容したという、例の少衆とか、分衆の誕生といったような流れとかいうのも受けて、大衆の時代は終わった、現代社会では欠乏動機から差異動機への転換が起こったんだという議論です。

次いで、村上龍が、とてもおもしろい評論を文藝春秋に書いていて、それは、悲しさから寂しさへというテーマなんです。これは、学生諸君にも人気で、けっこう一生懸命読んでくれる。三つ目のネタは、例の見田宗介さんの、また、大澤真幸さんがフォローもしてくれている、理想の時代から虚構の時代へという話。それから、今ではよく知られるようになった、バウマンの「リキッド・モダニティ」、ソリッド（固体的近代）からリキッド（流体的近代）へという見方を解説しています。

差異、寂しさ、虚構、そしてリキッド、という四つのキーワードで現代社会を読み解くというふうなことを偉い人たちが考えてるけど、みんなはどう思う？——私は何も料理をすることなく、学生諸君に解説だけして、あとは考えてもらおうような授業しかできませんでした。プラ

二〇 今田高俊『社会階層と政治』、東京大学出版会、一九八九、村上龍「寂しい国の殺人」、『文芸春秋』一九九七年九月号、見田宗介『現代日本の感覚と思想』、講談社学術文庫、一九九五、『社会学入門』、岩波新書、二〇〇六にも当該論文は再録、大澤真幸『虚構の時代の果て』、ちくま新書、一九九七、ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ』、大月書店、二〇〇〇—一などを教材として使用。

スアルファとしては、ほんの少しだけ、たとえば、ボルツ二の『意味に餓える社会』にひっかけ、イベントが非常に盛んな時代になっている事態をつかまえて、「感動に餓える社会」なんて言ってみたり、また、「データベース消費」^{二三}といったキーワードにも時に触れたりするんですが、やっぱり自分で現代社会なんていうのをどう捉えたらいいか、わからないですよね。せいぜい、「現代社会」はどんなふう論じられているか、少しだけ整理しながら提供するというようなことしか、結局できませんでした。

○序（関大社会学部での「共育」幻想）

何か長々と、だらだらとお話ししてきてしまいましたけれども、結局、私は、こういうようなことをしながら、次の二枚目の裏のほうを見ていただいたらと思えますけれども、講義とかゼミとかでは、こんなことをメッセージとして、学生諸君に投げかけ続けてきました。

もう社会学専攻の先生たちは、何だ、岩見先生、このネタしかないので、読まさせていただきます。「a」、これは下を見てください、それなりに私は気に入ってますので、読まさせていただきます。「a」、これは下を見てください、それなりに私は気に入ってますので、読まさせていただきます。「a」、これは下を見てください、それなりに私は気に入ってますので、読まさせていただきます。

二二 ノルベルト・ボルツ、東京大学出版会、一九九七年九八。

二三 東浩紀『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』、講談社現代新書、二〇〇一に拠る。

あるんですが、

——小生、生まれは名古屋だが、育ちは雑種。そのおかげで世の中って広い、所変われば文化が変わる、を実感した次第。そんな雑種人間がハマったのが社会学。気候・風土が異なれば植生が違うように、社会的な条件に応じて人間の「生」も様変わりする。その様変わりの兆しに気づかせてくれるのは、大人ではなく青少年だ。こんな見方をベースに現代日本の社会と文化のありようを読み解こうと、ただいま悪戦苦闘中。求む、若き同志！——

全共闘世代なのかなあ、僕もやつぱり。ある種、フアツションだけは、やつぱり身についたのかも知れません。こんな文章を一年生が読んでもきつとわからないと思うんですけど、本人はけっこう気に入ってますので読ませていただきました。もうゼミ募集はしませんので。あつ、募集に関係する文章は次のほうです。

次です。これはもう長い間、変えてないですね。「青少年の社会学」という看板で、サブタイトルが「現代社会を読み解くために」。何のことか、これだけではよくわかりませんが。指
導概要のところです。

——〈大人になる〉ことの意義と内容が明確であり、世代間の文化的継承や葛藤の処理がうまくいつているような場合には、「青少年」という対象は必ずしも社会的に面白いというわけではない。狭い意味での「教育」だとか、心理学的な「発達」だとかのテーマに、もっぱら彼らは取り囲まれてしまっただろうと。

しかし、今、子どもや若者はこれまでとは異質な社会化環境の中に置かれている。社会や文

ですかと聞いたら、——学んだ本人のほうがむしろ、使う言葉だし、僕が教えたと思っても、学んでくれてなかったら教え子ではないし、ね、と言われたんですね。つまり、先生から、こういうことをお蔭で学ばせていただきましたと、仮に卒業した後來てくれたら、そうかと言つて、そのとき僕は初めて、彼のことを教え子だったと言うかもしれないが、そうでなかったら、教え子という言葉は使わないんだ、と言われるわけです。

この言葉は僕の胸に焼きついていきます。どんなに自分がいいことをしゃべったと思っても、ずつとうつ伏せで寝てたら、池ポチャですもんね。届いてないですからね、メッセージは。たとえ教えたつもりであっても（たしかに教育労働としては教えた時間としてカウントするから、一応、給料はもらえるんでしょうけれども）、届いていないケースというのが圧倒的に多いのは、先生方もよく御存じだと思います。

そういう意味では、マルクスが言うように、売る／買う、あるいは、話す／聞く、といった対になるものは、みんな簡単にインタラククションというような事態が実現するかのようになっているけれど、両者が実際に「出会う」のは「命がけの飛躍」なわけです。だとすれば、教える／学ぶも、そもそも初めからやり取りが一致するものと前提しないほうが、議論は非常にクリアになると思ったりしております。

しかし、実際には、メッセージは送り続けるしかないわけです。たとえ池ポチャであろうが、相手のほうが全然こつちを向いてキャッチングしてくれないとしても、わがほうは打ち続けなきゃいけないんだらう、と。その意味からすると、この私の文は、打ち続ける球を、こんなふ

うな思いを込めて打ち続けているよ、という何か自己満足に終わるような文章にすぎないのかもしれない。けれども、こんな矛盾を抱えながらも、私は大学教員という仕事、「教える」という池ポチャをやってきたんだと思っています。

○そして今、スタート地点

さあ、こんな形で、何かいいかげんな話が進んでおりますけれども、ともかく、関大社会学部においては学生諸君に「共育」幻想みたいなものを振りまきながら、なんとかこれまでやって来ました。そして、今、私はやっとこれから、自分の人生というふうなものを自己対象化できる、そんな時期を迎えることができるんだ、という気持ちになっています。私のつたないキヤッチフレーズ風の物言いの一つに、社会化と文化変容をかかわらせて、人生は「文化の重ね着」だ、という表現があります。いろんなところでこれを使ってきました。

意味は簡単です。私が小学校時代は、日曜にでもなるといつも駐留軍の若い連中がチューインガムをかんだりして、家の前を歩いたりしていました。私が最初にしゃべった英語は、ギブ・ミー・チョコレートとか、ギブ・ミー・チューインガムという言葉だったんです。学生たちにも言うんですけれども、その町、名古屋ですけれども、繁華街などに行くと、シューシャインボーイですね、僕と変わらないような年頃の靴磨きの少年が町にいましたし、傷痕軍人、片手のない人とか、義足をつけた人が白い着物を着て、アコーディオンを弾いたりして、通行

人の皆さんから浄財をもらおうとしている…。そういう光景が、私の小学校時代には焼き付いていますので、戦前、戦中のことはもちろん知りませんが、敗戦後のいろんなものが、そういう残像として残っております。

そういう体験を、いわば肌に近い「下着」として身につけていますので、たとえばコンビニ弁当でもプラスチックのふたをとって、御飯粒が幾つか残っていると、まず、そこから食べる。それは、私の下着に当たるようなところに、まず、着込まれてるからなんだろうと思います。私の青年期となると、今度は中着、カッターシャツのような感じで、さっき言ったマルクシズムみたいなものとか、「政治の季節」に特有の文化を着込んでいく。

その次は、上着の番です。高度経済成長以降の何かいろんなもの、きょう来ているこのジャケットもそうですが、何かこういうものを着て（これはいつものとおり、イオンで買ってきたものですけれども）、時々、ちようど「帽子」みたいな、さらに飾り物を身につける。私にとって五〇歳を過ぎて出会ったようなもの、たとえばパソコンを少しやったり、スマホを持ったりしているんですが、それらは上着のさらに上に羽織っているようなものなんです。つまり、そうやって私たちは、そのとき、そのとき体験したものを重ね着していつている。それは絶対脱げないんだ、着替えもできず、ただただ重ね着する一方なのだ、というようなお話です。（ついでに言えば、今の中高生は、スマホ文化を確実にインナーとして着込んでいるので、私の場合の帽子のような意味合いとは、全然異なっているわけです。）

そういう意味では、私が今まで六十七年間かけて、いろんなものを着込んできた、やつとか

なり多様なものを重ね着するところまできた。とするならば、そういう自分の、俗に言う人生経験とかなんとかいうものを、ルーマンの言う「自己社会化」論というところに置き直して、じっくりと総点検してみたいなという気分になっていきます。それだけのものを重ね着してきたのだから、やつといるんな過去のものもちゃんと位置づけることができるようになるかもしれない、ひよっとしたら本当の意味合いといったものも見えてくるのかもしれない。格好よく言えば、やつとこれで私は、本当の意味での自分の文化の重ね着モデルというふうな研究視点というようなものを、自分をネタにしてやれる、そういう時期に来たんじゃないかなと。

こうした思いが募るに従い、この間、私がずっと気になってしやうがないことがあります。それは、人間にとつて「成熟」とは何かという、問いなんです。司会をしてくださっている山本先生なんか誘ってくださいって、何人かの先生とこの「成熟」というテーマで研究に取り組んだんですけど、私がなんとか理解したいと思つて挑戦していた、先に触れたルーマンの議論をもう背負い切れなくなつて破綻してしまいました。情けないかぎりですが、それはそれとしても、どこかで、この「成熟」概念にはこだわりたい、との思いが強くなります。

いかにポストモダンイズムだとか、ポストモダンの状況だといつても、人間の自己社会化が、データベース消費だとかなんとかと言われるような、あるいは萌えだとかなんとかと言われるような、そういう（「大きな物語」を欠いた）要素主義みたいなものに向かつてるとは言え、僕はやはり、年輪に例えられるような形の、あるいは、さっき言った文化の重ね着というふうな形で、人間の生というものを考えたい。人間が生きる以上、成熟という概念を手放すことは

できないのではないかというような気がして、いよいよ七十ぐらいになった人間が、年輪論だとか、成熟論だとか、ひよつとしたら「老成」論、あるいは成熟じゃなくて「熟成」論かもしれないが、そういうようなものを語りだす。そんな資格ができたのかなと思ったりしています。本当は下山の思想のほうで、僕には大事なのかもしれませぬけれども…。

ここで、やつと「社会学は人間学だ」というふうなレジュメの話につながっていくんですけど、見田さんが、いかにもテキスト風に書いてくださってるのですが、もう私があればこれ言うまでもなく、社会学は人間学だというふうには、皆さん、ここにおられる方は、よくおわかりだと思えます。ちよつと調子に乗って、レジュメの☆印の所を読んでみますが——「社会学のまなざしを欠いた人間学は、虚妄でしかない。人間とは何かを究極の問いとしない社会学は、もはや社会学ではない」と、言い切つていいような気がしています。

つまり、人間とは何かということを考えるときには、社会というのがどうしても入り込んでしまうんだという当たり前のこと、それをもう一度、スタート地点の確認作業に置いておきたいと思えます。今申し上げたような形で、経済学が、人間を扱えるわけではない。教育学も、望まじきもの、そういつたものへの意図的な社会化というような議論が前面に出たときに、人間の実像というのを見間違つてしまう、あるいは見損なつてしまう。とするならば、社会学こそが、具体的な人間の生というふうなものを見つめる一番重要な何かを提供してくれているんじゃないか。非常におめでたい発想かもしれませんが、そんな気がしてしょうがないんです。

では、そうした探究をしたたかにやれるエネルギーは何か、あるいはどこから生まれるのか

といったら、「愚鈍」だと思っんです。私が好きな言葉です。愚鈍な人間に感受性がないわけではない。だから、愚鈍な人間が愚鈍なまま感受性を磨くこと(資料⑬)によつて、何かが見えてくるんじゃないかと。私は、これは多分、だれにも話したことがないと思っんですけれども、まあまあ幾つかの本を、中学校や高校時代にも読んできましたが、武者小路実篤の『馬鹿一』という本に、たいへん心動かされたことがなぜか記憶に残っています。もう内容も覚えてはいませんが、今回読み直そうかと思いましたが時間がなくなりましたからそれも叶いませんでしたが、当時こういう人間に、非常に惹かれ、憧れたように思います。馬鹿が、馬鹿こそが何かを編み上げていくんじゃないか。私のきよさんの振り返りの中にもありましたように、たまたま、あることをやっていたら、それが調査につながつて、調査が職につながつてというように、いろんな形で、かつて自分の中に入り込んだ糸が、また何年か後に、他のところにつながつていく、以前と同じ糸がいつのまにか再生されて編み込まれていくというような、そういうことをいっぱい経験してきました。したがつて、この「愚鈍×感受性」みたいなものをバネにしながらか、私は、もうしばらく、教育というような場からは離れたところで考える、そんなことはしていけないのかな、と考えております。

最後、三十秒だけ。こういう他人の歴史話は、恐らく皆さんにとつてつまらないだろうなと思いつつ、もしそういう気配が見えたときには、ごまかすために何かを要するというので、私が一番脂が乗つてた——自分で言つたらおかしいですね——ときの新聞記事を、レジュメの後ろに準備してきました。ちよつと際どい内容のことも一部書いておりますが、まあまあ、何か

俺にもこんな元気なときがあつたんだと思つたものですから……。神戸新聞に——一つ毎日のものが入っていますが——、どれも、もちろんちよつとしたアイデアだけで書いてるんですけども、九三年と九七年の、四十代後半の、やっぱり、あのころで僕のピークは終わつたんだなと思つたりしています。きょうは、私が何をしてもいい日だと勝手に解釈しましたので、つけさせていただきました。「おやじのたこやき」(資料⑩)なんていうものぐらいを読んでいたけると、うれしいなと思います。

まとまりのない、最終講義なんてとんでもなく、それらしき内容は全くない、中身の薄いことしかお話しできませんでしたけれども、きょうは私の特権ということで、ゼミの卒業生の皆さんに照準を合わせて勝手にツイートさせていただきました。本当に皆様、ありがとうございます。

最終講義：資料

- レジュメ：「社会学は人間学、と語り来て」

- 神戸新聞：「くらし・家族」
 - ① 1993.01.22 通塾電車とスナック菓子
 - ② 1993.02.26 ことばの自分史
 - ③ 1993.03.26 記念切手と絵はがき
 - ④ 1993.04.23 同窓会の人間学
 - ⑤ 1993.05.21 地域の「共育」力
 - ⑥ 1993.06.18 ランドセル文化の変容

- 神戸新聞：「随想」
 - ⑦ 1997.05.16 居酒屋パワー
 - ⑧ 1997.06.02 歯ごたえのある話
 - ⑨ 1997.06.17 教育実習に学ぶ
 - ⑩ 1997.07.02 おやじのたこやき
 - ⑪ 1997.07.17 意味のもつれを解くとき
 - ⑫ 1997.08.04 「福祉」問答
 - ⑬ 1997.08.19 「少年H」の感受性

- 毎日新聞：「私見／直言」
 - ⑭ 1995.05.18 消費社会に生きる若者の不幸

○序（関大社会学部での「共育」幻想）

- a. 小生、生まれは名古屋だが、育ちは雑種。そのおかげで世の中って広い、所変われば文化が変わる、を実感した次第。そんな雑種人間がハマったのが社会学。気候・風土が異なれば植生が違いうように、社会学的な条件に応じて人間の「生」も様変わりする。その様変わりの兆しに気づかせてくれるのは、大人ではなく青少年だ。こんな見方をベースに現代日本の社会と文化のありようを読み解こうと、ただいま悪戦苦闘中。求む、若き同志！

（『関西大学社会学部教員からのメッセージ 2006』〔新入生に配布〕）

- b. 「ゼミ募集」：（『社会学部ゼミ募集要項』より）

◇テーマ： 青少年の社会学——現代社会を読み解くために

◇指導概要：（大人になる）ことの意義と内容が明確であり、世代間の文化的継承や葛藤の処理がうまくいっているような場合には、“青少年”という対象は必ずしも社会的に面白いというわけではない。狭い意味の「教育」だとか、心理学的な「発達」だとかのテーマに、もっぱら彼らは取り囲まれることになる。

しかし、今、子どもや若者はこれまでとは異質な社会化環境の中に置かれている。社会や文化に地殻変動が起こっていると言ってもいい。このような時、青少年という存在は——少なくとも潜在的には——現代社会の揺らぎやキシミにかなり感度よく感応する、格好の社会学的な「対象」となる。

政治・経済・教育・文化……といった領域を常識的にはじめから切り取ってそこだけを見ようとするのではなく、何か「まるごと」見ることができそうな場面をさがしているオメデタキ若者、いろいろな“顔”をもったこのしたたかな白面相社会ともいえる現代社会の全容を、なんとかして自分の絵筆＝感性と智慧でスケッチしてみたいとの気持ちをおさえることのできないミノホドシラズメの若者——そんな“素直な若者”とゼミで出会いたいと思っている。

○そして今、スタート地点（*）

☆社会学のまなざしを欠いた人間学は、虚妄でしかない。人間とは何かを究極の問いとしない社会学は、もはや社会学ではない

※社会学は人間学である／人間というものの自体が、「関係」である／「身体」自体が、多くの生命の共生のシステムなのである／…「社会学は…現代の知において捉えられた人間の学、つまり、関係としての人間の学である」（見田宗介 2006『社会学入門』岩波新書 p.4）

- 自らを（人間）と呼ぶ、ちょっと／大分変わった「生きもの」が、いかなるカテゴリーのもとに、自らを（言分け）るか / 「成熟」とは？
cf. 経済学、教育学のまなざし方からは、具体的な「人間の生」が見えてこない？
- 愚鈍×感受性：武者小路実篤『馬鹿一』的世界へ ⇒ 「馬鹿」が何を編み上げるか（未完）

社会学は人間学、と語り来て (最終講義)

* * 考えあぐねた結果、結局自らを振り返ってみることしかできなかったという粗末なお話 * *

○序の序の序 (関大着任以前の道標)

- ・ 滋賀大学経済学部@山崎良也ゼミ : 1967-8 年度 (ケインズ ; 一般理論、藤野正三郎 ; 日本
の景気循環・卒業論文 1969.1 「低開発国問題の基本視点と世界形成主体への道」)
- ・ 滋賀大学@教職科目 : 「教育は愛」 (cf. 「教育は文化の遺伝」「教育心理学」)
- ・ 京都大学教育学部聴講生 : (1969 年秋?) 「社会学」との出会い@百万遍の古書店
- ・ 大学院受験用論稿 (1971 年 1 月) 「現代社会の基礎構造—原理的考察」(社会階層と教育
を考える)
- ・ 修士論文 (1973 年 1 月) 「日常生活の社会学的研究—社会構造論的アプローチ」: 生活
構造論
- ・ CDI 報告書『生活財生態学』(石毛直道・栗田靖之・疋田正博ほか)
- ・ W.A.プライス (片山恒夫訳) 『食生活と身体の退化—未開人の食事と近代食・その影響
の比較研究』(翻訳協力 500 頁強)
- ・ 天理市御経野地区労働実態調査 (被差別部落の職業と教育) @大理大学

○序の序 (関大社会学部での実習・講義)

- ① 社会調査実習 1981 (人間現象、文化現象、社会現象→「観察対象」の選択→調査)
- ② 教育社会学 1980 (「教育」関係・現象の社会学的研究、学歴主義とは、「生徒化」)
↓
1984 「青年の意識と行動」(近藤大生・有本章編『現代社会と教育』: 福村出版)
1986 「ミーイズム社会」(岡田至雄・徳岡秀雄編『基礎社会学』: 福村出版)
青少年社会学 (1993.3 『青春の変貌—青年社会学のまなざし』: 初出 1982-92)
- ③ 日本の社会と文化 1988 (「日本論」・「日本人論」というまなざし、伝統の創造)
Japanese Studies Centre (オーストラリア メルボルン: J.V.ネウストブニー、杉本良夫)
- ④ 現代社会論 1997 (個人化の徹底、大きな物語の終焉: 「差異動機」「寂しさ」「虚構」「流
体化」、意味に餓える社会・感動に餓える社会)
↓
(*) 《人間学》(《文化の重ね着》モデル→自己社会化論): やっと自らの人生を素材に
検証する時が来た!



装丁：金井紀子

発行：岩見ゼミ合同同窓会事務局 [平成 26 年 3 月 15 日発行]